

大森地区優秀作文



支えられている日常、支えていく未来

大田区立馬込中学校 三年 山中 未彩

昨年のはじめ、能登半島で大きな地震が発生し、多くの人が家を失い、寒さの中で避難生活を送っている様子がテレビで報道されていました。暖房のない避難所で毛布にくるまりながら過ごす人々の姿が印象に残り、私も胸が痛くなりました。また、近い将来に起こると言われている「南海トラフ地震」についてのニュースも見かけます。自然災害は、いつ、どこで起きるかわかりません。では、もし自分や家族が被災したとき、私たちはどう助け合おうのでしょうか。その支え合いのしくみの中心にあるのが、税金です。私は、災害と税金の関係について改めて考えてみました。

災害が起きた直後、まず必要になるのが避難所です。学校や公民館などに設けられた避難所では、水や食料、毛布、簡易トイレなどが用意され、人々の命と生活が守られます。これらの物資を購入、備蓄する費用や、避難所の運営にかかる費用は、私たちが納めた税金によって支えられています。また、被災地では消防士や自衛隊、警察などがすぐに現地に入り、救助活動を行います。建物の下敷きになった人を助けたり、被害の状況を確認したりと、命を守るための活動が続いているのです。彼らが使う装備や車両、活動にかかる費用も税金によって支払われています。報道では、泥にまみれながら懸命

に救助にあたる姿が映し出され、胸を打たれました。

さらに、私の家の近くの公園にも、防災倉庫が設置されています。普段は子どもたちの笑い声が響く明るい場所ですが、いざというときにはそこが命を守る拠点になります。倉庫の中には非常食や飲料水、毛布、簡易トイレなどが備えられていて、それらもまた税金で準備されています。ごく身近な場所に防災の仕組みがあると知り、税金は災害時にだけ使われるのではなく、被害を最小限にとどめるため、すでに私たちのすぐそばにあるものなのだと気づきました。

また、災害の被害が落ち着いたあとにも、復興には多くの支援が必要です。壊れた道路や橋、学校や病院などを修理、再建するには大きな費用と時間がかかります。住む場所を失った人々への支援金や仮設住宅の整備などにも、税金が使われています。税金は、ただの「お金」ではなく、人の命や暮らしを守るための大切な手段であることを実感しました。

これまで私は、税金は大人が払うもので、自分にはまだ関係のないものだと思っていました。けれど今は、それが社会全体の支え合いの仕組みであり、非常時にこそ力を発揮する大切なものだと感じています。将来、自分が税金を納める立場になったときには、そのお金が誰かの支えになることを意識しながら向き合いたいです。そして、災害が起きたときには、税金という社会のしくみと、自分自身の行動の両方で誰かを支えられる、そんな人になりたいと思います。